

慈現〜じげん〜

1号

寺報ができました！

寺報とはお寺が発行する情報誌のことを指します。

お参りいただいた方やご縁をいただいた方へ眞英寺の雰囲気や伝わる一助となるべく、このたび寺報を発刊する運びとなりました。

寺報の名称は「慈現^{じげん}」。

この名前は眞英寺の山号「慈現山」から名付けました。

あみだぶつ

た。「阿弥陀仏の慈しみ」が、まさに今ここに現れている」という意味がございませう。また、そのような寺報になることを願いとしております。眞英寺の行事でのご法話や行事のご案内を掲載していければと考えております。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

新潟県糸魚川市 光徳寺

住職 水嶋 聡 先生



■曾我量深師の言葉

最初に曾我量深という方の言葉を読ん
でまいります。

無量無数の人々が／私たちの身の中心の中に生きている。

そしてどうか助かってくれ／そして私を助けてくれと／みんな願っている。

今日はこの言葉に触れながらお話いたします。どうぞよろしくお願ひいたします。

お盆のつどい

ご法話

二〇一九年七月七日（日）

新盆を迎えられるご家族と共に「お盆のつどい」合同法要を毎年七月に開催しております。法要ではお勤めをした後にご講師からご法話を聞かせていただきます。今年度は水嶋聡先生にご法話をいただきました。ここでは、当日のご法話のダイジェスト版を掲載いたします。

年が明けて、あつという間にもう七月。月日はあつという間に流れていくことを皆さんも感じていることだと思います。ところが、大切な方を亡くしたご家族のその後の時間は非常に長いとお聞きしております。それは大切な方との思い出を繰り返すからこそ、時間の流れが長くなる。ですから時間というのは一概にサッと流れるわけではなく、私たちの思いを繰り返すほど長く感じられる。大切な人であればあるほど、その時間の長さは長くなつていくのだと思います。

■ふと気づく寂しさ

私たちが大切な人を亡くす。その寂しさは他のものでは埋められません。それどころか、折に触れて悲しみに暮れる。それが大切な人を亡くした時間ではないでしょうか。

あるご夫婦の奥様がリンパ腫を患っています。長い闘病生活をご夫婦で乗り越え、ついにリンパ腫が治って自宅へ戻ってきました。ところが、さてこれからというときに、別のご病気で奥様が突然亡くなってしまいました。葬儀のときの「ご主人のあいさつがですね。二人でガンには勝ってきたんだ。でも何でこんな形で別れなきやならないのか」。このようなことを「空しい」という言葉とともにおっしゃいました。

そのご夫婦は生前二人でよくパチンコへ行っていたそうです。亡くなった後にご主人が気晴らしにパチンコへ行ったそうです。ところが「パチンコが好きでおもしろくて二人で行っていたのに、亡くなって一人で行ったら勝っても負けても何にもおもしろくない。」とお話してくださいました。きっと二人で行っていたころは帰ってきて「あの台は

出た」と二人で反省会をしていたのでしょうね。そういう話し相手がいないということに改めて気がついた。今までそのことに一切気がつかなかった。パチンコは楽しいものだと思っていた。ところが実は二人で一緒にいたことが楽しかったと、改めて失った大きさや寂しさを感じられたのですね。

皆さんの生活のなかで「ああ、ここに生きていた」「ここでこんなことをしていた」と失ってはじめて、その方の存在の大きさがわかる。そこに「寂しさ」という穴が空いてしまった。その空いた穴をひとつひとつ確認していく、そういう繰り返し時間がこの新盆まで続いてきたのだと思うのですね。

■日常に流される

そういう中で大切な人と別れた悲しみは時間が癒すのだと、このように言われていることがございますがどうでしょうか？

どちらかというと日常が悲しみを洗い流していく、忙しい日常に紛らわされながら悲しみというものがゆっくり流されていく。この方が確でないかなと思います。

ある先生が日常をこのようなたとえ話で教

えてくださっています。

嵐が過ぎた後の大きな川。濁流が目の前を流れている。その川の上流から一人の人が流されてきた。その人はもがきながら助けを求めながら流されてきて、私の目の前でその川に飲み込まれていってしまった。その人はもう二度と浮き上がることはなかった。しかし川は何事も無かったかのように流れている。これが私たちの日常ではないか。

このように日常のさまざまなものに流されながら生きています。そこに一人の人の悲しみ・うめき・叫びが聞こえてきたとしても、また日常に流されていく。それが日常ではないかと、このように教えてくださっています。私たちの日常というものは、このような形で私たちの悲しみを流していく。いかがでしょうか。私たちはそういう形で時間が過ぎていくのではないかと感じるわけです。

■無量無数の人々が身の中に生きている

あらためて、今日ご紹介した言葉の「身の中に生きている」とはどういうことでしょうか。私はだんだんと年を追うごとに父親に似てきたと言われるようになってきました。似

てくるとは父親が私の中に「身」として生きている。こういうことだと思うのですね。

あるご家庭で食事のときに自分の手元に手拭きを置いておかないと落ち着かないという方がおられました。あるときご法事があって親戚一同で食事をしていて、その方の叔母さんも同じように手拭きを手元に置いているのです。その叔母さんも「私も手元に手拭きがあつた方がいい」と言うのですね。実はその家のおじいさんがやはり手拭きを手元に置く習慣があつたのです。おもしろいもので、そんなところまで似てくるのですね。

このように人間の習慣は思わぬところまでつながっていて、それに一切気づかない。けれども、それが無いとどうも落ち着かないという身を生きているのです。おじいさんの身がそういう形で身の中に生きているということがあるのでしょうか。代々そのお家で知らず知らずのうちに受け継がれている、その身といるものがあるのかもしれない。ですから「私たちの身の中に生きている」というのは、この身体や動作のすべてにおいて私たちは親や先祖の「身を生きている」このように

言えるのではないのでしょうか。

では先祖や親だけかというと、そうでもありません。私のお寺は行事の後には集まった皆さんに手作りの食事を提供いたします。その料理は近所の方が集まって作ってくださるのです。私の連れ合いがその手伝いに入つたとき、たくさんのお皿に食材をお箸で盛りつけておりました。するとある女性に「箸ではなくて、手でやるといいよ。手は箸よりも上手に使えるよ。」と教えられました。教えてくださいくださった方はもう亡くなっているのですけれど、盛りつけをしているとその言葉・姿がふと出てくる「そういうえば自分にこういうことを教えてくれた方だったな」と、そこに今でも生きているということでしょう。いろいろな方との関わりの中で、私たちはその方の生き方が身の中に生きているということがあるのではないのでしょうか。

亡き方の願いを知る―出遇い直す―

ご紹介した言葉には

どうか助かってくれ／私を助けてくれ
と／みんな願っている。

とあります。「助かる」を「幸せになる」と置き換えるとイメージしやすいでしょうか。亡くなった人がこの私に「幸せになつてくれ」と願い「そして私を幸せにしてくれ」と願っている。亡くなった方はあなたが幸せにならない限り自分も幸せになれないと言うのでしよう。私どもの幸せは一人で噛みしめるということがなかなかできません。例えば、食卓を囲んでいて、その場にいる誰か一人でも悲しい思いをしていたりすると幸せではありません。みんなの幸せが揃ってはじめて幸せと言えるのだと思うのです。

同じようにあなたが助からない限り私は助からないのだと言うわけです。私が助からない限り私の親は助からないのです。皆さんおひとりおひとり同じことが言えると思うのです。

では、「助かる」とはどういうことでしょうか。ここでは「助かる」を改めて「出遇う」という言い方にしようと思います。「自分に出遇ってくれ、そして亡き私と出遇ってくれ」と置き換えようと思うのです。亡き人と再び出遇い直す、これが亡き人を助けていく

ことなのだと言い直そうと思うわけです。

亡くなった方は実在としてはもういませんからもう会えない。それが寂しいということに繋がっていく、だから会いたいのですね。それにはまず「自分に出会う」ことが大切なのだ、私たちは願われているのですね。

■濁りで見えない私

出遇えないということは、出遇っているにもかかわらず、わからないということです。

「出遇えない」ということを浄土真宗の宗祖親鸞聖人は『正信偈』において「濁る」と押さえました。濁っているとは見えないということです。人と人が出遇えないのはこの濁りがあるからだと言われています。私の目やところが濁っている。だから人と出遇えないのだと言われます。

この「濁り」を取る「はたらき」を「浄」と呼びます。また、私たちの人間関係、その関係性はどこでつながっているかというところ、地面つまり「土」でつながっているというのですね。だから「浄土」と言うのです。「浄土」というのは人と人が本当に出遇っていく

ような「はたらき」を指して言うのですね。

私たちは一緒に生きていてもなかなか出遇うことができません。それが孤独を生み出すのです。孤独というのは「相手のことがわからない」「誰も私のことをわかってくれない」つまりは「人のことが見えない」という濁りからきているのです。ですから、浄土とは人と人が出遇い、この孤独を除いていく「はたらき」これを浄土と呼ぶのです。

浄土という言葉から「私たちの濁りというものはどういうことか」「なぜ人と人が出遇えないのか」「私たちはなぜ孤独に陥るのか」という私たち自身の問題を教えていただいているのです。

親鸞聖人の師匠に法然上人という方がおられて次のような言葉を残されました。

浄土宗のひとは愚者になりて往生す

「浄土宗のひと」とは宗派名としての浄土宗ではなく「人と人が本当に出遇って共に生きていきたい」というところを生活の中心に置くことを「浄土宗のひと」と呼んでいます。その人は「愚か者」という自覚を

もってはじめて人と出遇っていける人になる、このように法然上人はおっしゃるのですね。「亡き人と出遇う」そのときに大切なのは自分自身が愚か者であったのだと頭が下がってはじめて亡き人と出遇えるのです。私たちが濁っている限り出遇えない。濁っているというのは「私は愚か者ではない」というあり方です。そのあり方ではなかなか出遇えないのだということを言っているのですね。

■「愚か」であることの自覚

では、愚か者とは一体何でしょうか。あるご夫婦のお話を例に挙げさせていただきます。ご主人はご家族や周りの人に対して非常にやさしい方でありましたが、突然、心筋梗塞で亡くなってしまいました。

奥様は何でもご自分の力ですぐにやっている優秀な方でしたが、そのご主人を亡くされてから何一つ手につかなくなってしまったというのです。今までだったらすぐにできていたことができなくなってしまいました。そのことに苦しんでいた奥様はお子さんに「お父さんがいなくなったから仕方ないよね」と言われたのです。そのときに初めて気がつき

ました。「私は自分で何でもできると思っていた。でも、実はいつも夫から『それ、いいね』『それ、やればいいよ』そういう声掛けをもらっていた。実はその声掛けによって私は背中を押してもらっていた。それなのに私はその声を聞かずに、夫がいなくても何でもできると思い込んでいた。夫の大切さを全然わかっていなかった」というのです。「そういう愚かな私であった。そのときに初めていなくなつた大ききよりも、そばにいてくれて私をずっと支えてくれた温かさに気がついた」とおっしゃっておられました。

私たちは自分中心の濁つた眼で亡くなつたということを考えてしまうと、一体私が何を願われているのか、どのように私に接していたのかということが全然見えなくなつてしまふのでしよう。ところが、何もできない私であつたという愚かさに立ち返つたならば「この愚かな私をずっと支えてくれた人であつた」という受け止め方になつていくということでしょう。自分の愚かさを改めて知ることがあつてこそ、この私を支え続けてくれた方々のそういう一面が見えてくる。そ

ういうことがあるのではないでしようか。

■旗印は南無阿弥陀仏なむあみだぶつ

そういう形で人に出遇つていくはたらきを浄土とこのように言われるわけです。浄土というのは「亡くなつても遇える世界」を言うのではないかなと思います。改めて自分がどのような者なのか、そこをはつきりしていくことが必要なのではないかなと思います。

では自分の愚かさは何によつて照らし出されてくるのか。それは仏法（仏の法）であると思います。具体的には先に歩まれた方々の言葉であつたり「無量無数の人々」の姿であつたり、そういうものが改めて「私たちの身の中、心の中に生きて」どうか人に出遇つてくれ、どうか人に出遇うような「はたらき」をいただいでくれと、このように願われているのでしよう。その旗印を南無阿弥陀仏という念仏でいただいでいるのです。私たちは私たち自身が濁つているということを知らず、自己中心的になり、隣の人を見ようとせず、さらには誰も私のことをわかつてはくれないという孤独を抱えることがあります。こういう濁りの中で流され続けるような時間

を過ごしているのではないかなと、このように思うわけでございます。

改めて悲しみを通して、人と出遇うことの大切さを教えてもらっているのだと思うのですね。悲しみというものは非常に切なく受け入れがたいことでありましよう。ところがそこを介さない限り、私たちにとつて本当の人と出遇う世界は広がつてこない、こういうことではないかなと思います。

人と出遇うということは亡くなつていった方と出遇うことだけではありません。例えば私たちの家族。家族というのはわかつていようで一番わからないのが家族ではないでしようか。そこに悲しさをおぼえているのがまた私たちの日常ではないでしようか。

そういう中で改めて自らが愚者であるという自覚をいただきながら、この私を包んでくれている世界に出遇いたいと、このように思うこととございます。その旗印が南無阿弥陀仏という念仏であると受け止めていくことでございます。本日はお盆ということと亡き人とどう出遇つていくのかをお伝えさせていただきました。

南無阿弥陀仏

お寺の掲示板

今号のことば

人間は 偉いものではない 尊いものです

安田理深

二〇一九年は九月と十月に台風が上陸し大きな被害を出したことは記憶にも新しいことと思います。台風が過ぎた翌日、街を歩いていると「台風には勝てませんね」と話している声が聞こえてきました。

ご紹介したことばの「偉いもの」とは、「勝ち負け」「優劣」「役に立つ」「役に立たない」を比べ合う方でしょうか。「台風に勝てない」という言葉もこのあり方から出てきます。一方で「尊いもの」とは比べ合う必要がなく、「あなたはあなた自身が尊いのです」という呼びかけの言葉です。

2020年 年間行事予定表

1月2日(木) 14時	修正会 <small>しゅうしょうえ</small>
3月22日(日) 14時	春彼岸会法要 <small>ひがんえ</small>
7月5日(日) 11時	お盆のつどい <small>ひがんえ</small>
9月20日(日) 14時	秋彼岸会法要 <small>ほうおんこう</small>
11月7日(土) 11時	報恩講 <small>ほうおんこう</small>

令和2年(2020年)年回表

1周忌	平成31年 / 令和元年(2019)
3回忌	平成30年(2018)
7回忌	平成26年(2014)
13回忌	平成20年(2008)
17回忌	平成16年(2004)
23回忌	平成10年(1998)
27回忌	平成6年(1994)
33回忌	昭和63年(1988)
37回忌	昭和59年(1984)
43回忌	昭和53年(1978)
47回忌	昭和49年(1974)
50回忌	昭和46年(1971)

眞英寺第十三世住職(前住職)還浄

法名 寶照院釋廣秀

令和元年五月十一日 命終
寿算 九十三歳

前住職・三浦廣秀ひろひでが五月十一日に九十三歳のいのちを終えました。大正十五年に生まれ、激動の昭和・平成の時代を生ききった人でありました。住職在任中は戦災で焼失した本堂の再建と崖地と墓地の整備を行い、また住職を退いた後も常に境内や墓地の清掃・除草をして美化に勤め、いつでも気持ちよくお参りできるお寺づくりに尽力しておりました。その意志は次の世代へ引き継がれております。

生前はひとかたならぬ御厚誼にあずかり深い感謝を申し上げ、ここに報告いたします。



眞英寺寺報「慈現」第1号

発行 眞英寺(眞宗大谷派 京都東本願寺)

東京都新宿区若葉二丁目一番三

TEL 03-3351-5955

E-mail m-miura@senninji.jp

URL <https://www.senninji.jp/>

